

英語コーパス学会 第 51 回大会資料

日時：2025 年 9 月 2 日（火）－9 月 3 日（水）
会場：大阪大学 箕面キャンパス 外国学研究講義棟
大阪府箕面市船場東 3-5-10

第51回大会 プログラム

■第1日目：9月2日（火）
受付開始 9:30（521 講義室前）

●ワークショップ：10:00-12:00（501 講義室）
CasualConc ではじめるトピックモデリング入門

今尾康裕（大阪大学）
藤田郁（九州大学）

<休憩 12:00-13:00>

●開会式・総会 13:00-13:40（記念ホール）

1. 会長挨拶
2. 開催校挨拶
3. 総会
4. 学会賞審査報告
5. 事務局からの連絡

司会：小島ますみ（事務局長）（名古屋大学）
田畑智司（大阪大学）
清水政明（大阪大学外国学専攻長）

今林修（学会賞選考委員長）（広島大学）

●研究発表：13:50-16:10

	Session 1（記念ホール） 司会：投野由紀夫	Session 2（501 講義室） 司会：藤田郁	Session 3（523-524 講義室） 司会：肖媛媛
13:50-14:20	【1-1】 小林雄一郎 Boruta によるテキスト分類と特徴表現抽出	【2-1】 蛸嶋亮介 英文法習得を支える気づきと内発的動機の形成-公立高校における DDL の教育的効果に関する実践的研究	【3-1】 曹芳慧 Hardy 小説の伝達節によるジェンダー表象、および語りの文体
14:25-14:55	【1-2】 宮崎佳典・田中省作 t スコアと相互情報量における頻度効果の代数的考察	【2-2】 松岡翼 日本における英語科教育法関連書籍の目次分析：BERTopic によるトピック構造の変遷	【3-2】 Li Chenjie A Stylometric Comparison of Narrative and Dialogic Features in Conan Doyle's Works and Their Pastiches
	Session 4（記念ホール） 司会：小林雄一郎	Session 5（501 講義室） 司会：蛸嶋亮介	Session 6（523-524 講義室） 司会：李晨婕
15:05-15:35	【4-1】 Chris Cooper & Yukio Tono Comparing different transformer approaches for CEFR-level text classification: A work-in-progress report	【5-1】 藤田郁 Alfred Tennyson と Charles Tennyson の副詞比較	【6-1】 幸一尋 結果状態を表す複合形容詞と結果構文のコロストラクション分析
15:40-16:10	【4-2】 Yukio Tono & Chris Cooper Investigating Semantic Shift and Polysemy in Basic Verbs Across CEFR Levels Using BERT-based Methods	【5-2】 Seamus Johnston Tracing the Origins of Habitual Do in Irish English (a corpus study of the 1641 Depositions)	【6-2】 Xiao Yuanyuan Subjective Bias Detection and Analysis in English Political News

<休憩 16:10-16:25>

●シンポジウム：16:25-17:55（記念ホール）

生成 AI 時代のコーパス研究

- シンポジスト： 水本篤（関西大学）「生成 AI を英語コーパス研究で利用するときに知っておくべきこと」
宮川創（筑波大学）「古代末期の修道院文献の間テキスト性ネットワーク：
大規模言語モデルによる探知と分析」
Laurence Anthony（早稲田大学）「生成 AI とコーパス言語学の融合：
クラウド／ローカル型モデルの活用に向けて」

●情報交換会（懇親会） 18:15-20:15（3 階食堂「レインボー」）

※懇親会は事前予約制です。<https://forms.gle/KV76c5RMqJohjMJd9> より 8 月 23 日（土）までにお申込みください。

■第2日目：9月3日（水）
 受付開始 9:15（521 講義室前）

●研究発表：9:30–10:35

	Session 1（記念ホール） 司会：田畑圭介	Session 2（501 講義室） 司会：真部大輔	Session 3（523–524 講義室） 司会：福田航平
9:30–10:00	【1-1】 田中悠介・瀬戸口彩花・近大志・神澤克徳 The KIT Speaking Test Corpus 専用検索インターフェースの開発	【2-1】 澤口遼 語彙リスト項目提示順序への提言: ChatGPT による学習プロセス観察データから	
10:05–10:35	【1-2】 投野由紀夫・渡辺亮嗣・星野守 英語コーパス総合サイト Lingua Corpus Network の公開	【2-2】 川越涼太 英語リスニングテキストにおける難易度決定要因の分析と自動推定の可能性	

●基調講演：10:45–12:15（記念ホール）

「確率的なオウム」にできること，またそれがなぜできるのかについて

横井祥（国立国語研究所）

<休憩 12:15–13:30>

●研究発表：13:30–15:50

	Session 4（628–629 講義室） 司会：安間一雄	Session 5（501 講義室） 司会：澤口遼	Session 6（523–524 講義室） 司会：田中美優
13:30–14:00	【4-1】 柿葉敦子・西垣知佳子・赤瀬川史朗 中学生向け DDL ツールにおける日本語検索機能の開発と授業実践	【5-1】 Daisuke Manabe Exploring the effectiveness of data-driven learning and its integration with Generative AI	【6-1】 福田航平 Grammar Patterns に基づく動詞項構造構文の自動抽出システムの構築
14:05–14:35	【4-2】 望月圭子 学習者コーパスに基づく英語対話能力の縦断的研究	【5-2】 Trevor Sittler Is AI Persuasive: A Multi-Dimensional Analysis of AI and Learners on Speaking Tasks	【6-2】 Yuta Sato Investigating the “Verb PRON it” Construction in British English: A Corpus-Based Analysis of Its Characteristics and Occurrence Patterns, Focusing on ‘Give’
	Session 7（628–629 講義室） 司会：望月圭子	Session 8（501 講義室） 司会：田中悠介	Session 9（523–524 講義室） 司会：佐藤勇太
14:45–15:15	【7-1】 八野幸子 理科との連携における教科等横断的英語教育での古典的文章活用可能性の検討—CEFR-J Grammar Profile を用いた文法的側面での活用可能性の分析—	【8-1】 田畑圭介・山縣節子 単純形副詞のタイプと容認性について	【9-1】 Yoshikata Shibuya & Kim Ebensgaard Jensen Bro Constructions Across America: A Twitter Corpus-Based Study
15:20–15:50	【7-2】 安間一雄 高校英語教科書に見るテキストタイプの相違	【8-2】 南佑亮 No point/sense/use の補文における形式的変異について	【9-2】 Takuma Natsume On building a speech corpus with word-level annotation using Internet Archive Radio Collection

●閉会式：15:50-16:10（501 講義室）

要旨

■ワークショップ (9月2日)

CasualConc では始めるトピックモデリング入門

今尾康裕 (大阪大学)

藤田郁 (九州大学)

トピックモデルは、共起情報を元にコーパス内の語を分類し、意味的なつながりを持つ単語群にまとめる統計手法です。事前の学習データや辞書を必要とせず、「意味」にアプローチできる点が大きな特徴であり、他のテキストマイニング手法とは大きく異なっています。言語や文学の研究でも幅広く応用されていますが、実際に使用、分析するには **Terminal** やコマンドプロンプトといった **CUI** アプリケーションを利用する必要があります。また、図式化や解釈を行うためには、出力結果にさらに複数の処理を施さねばならず、実行方法や出力の扱い、解釈に戸惑うこともあるかもしれません。

本ワークショップでは、トピックモデル分析の基本的な概念と前処理について解説をしたのち、**macOS** 用 **GUI** コーパス分析アプリである **CasualConc** のトピックモデル分析機能を利用して、ハンズオン形式で操作方法を紹介し、出力結果の読み取りやグラフの解釈などについて提案します。

■シンポジウム (9月2日)

生成 AI 時代のコーパス研究

シンポジスト： 水本篤 (関西大学) 「生成 AI を英語コーパス研究で利用するとき知っておくべきこと」

宮川創 (筑波大学) 「古代末期の修道院文献の間テキスト性ネットワーク：

大規模言語モデルによる探知と分析」

Laurence Anthony (早稲田大学) 「生成 AI とコーパス言語学の融合：

クラウド／ローカル型モデルの活用に向けて」

本シンポジウムでは、生成 AI 時代のコーパス研究 (**Corpus Studies in the Age of Generative AI**) と題し、3 名の発表者がそれぞれの行ってきた生成 AI を使用したコーパス研究やツール開発の紹介を行う。

第 1 発表者の水本は、生成 AI と英語コーパスを活用した研究を近年進めている。本発表では、研究やツール開発を通じて明らかになった、英語コーパス研究における生成 AI 活用時の注意点を紹介する。特に、文脈やニュアンスの解釈、一貫性に課題があるため、専門家による確認と解釈が不可欠であることを実例とともに示す。

第 2 発表者の宮川は、コプト語で書かれた古代末期の修道院文献を対象に、**Claude** および自身が開発した **THOTH AI** を用いて、聖書や教父文献からの隠れた引用や引喩などを自動検出する手法を開発した。LLM の文脈理解能力により、従来困難であった大規模な引用ネットワークの抽出と修道院間の知識伝播パターンの可視化が可能となった。発表では、実例を示すとともに、低資源言語 (コプト語) の課題について議論し、計算言語学と文献学を融合させた新手法を提案する。

第 3 発表者のアントニは、大規模言語モデル (LLM) と従来のコーパス分析手法がそれぞれ持つ固有の強みと課題に注目する。現在の LLM は質的な解釈に優れている一方で、定量的な分析には限界がある。これに対し、従来のコーパス手法は定量分析に適しているが、得られた結果の質的・主観的な解釈は依然として人間に依存している。本発表では、こうした特徴をふまえ、**AntConc** コーパス分析ツールに新たに追加された AI プラットフォームの活用事例を紹介する。このプラットフォームの大きな特徴は、大手クラウドベースの高性能 LLM に加え、教育現場などで扱う機密性の高い個人データに対応するための小規模なローカル LLM も選択できる点にある。この新たなフレームワークは、AI とコーパスを統合した言語研究および教育の新たな可能性を切り開くものである。

■基調講演 (9月3日)

「確率的なオウム」にできること、またそれがなぜできるのかについて

横井祥 (国立国語研究所)

巨大データに潜むパターンを計算機で発見し処理する技術が著しく発展したことを契機に、人間の言葉を自在に「読み」また「書く」ことのできる人工知能システムが次々と登場しています。これらのシステムは一体どのような仕組みで動いており、また人間とはどのような点で異なるのでしょうか。本講演では、数理と技術で説明がつく範囲でかつ直観的に大規模言語モデルの能力とその機序を説明したいと思います。さらに、これらの数理や技術を深めていった先で、ヒトの言語や知性について何がわかり得るのか、また何がわかり得ないのかについて議論できればと思います。

第1日目：9月2日（火）

■研究発表 1-1（コーパス、ツール、手法などの紹介）

Boruta によるテキスト分類と特徴表現抽出

小林雄一郎（日本大学）

コーパスから特徴表現を抽出する手法は数多く存在する。その中で、比較的低い計算コストで大量のデータを分析できるランダムフォレストの使用例が近年増えている。しかしながら、ランダムフォレストから得られる変数重要度がいくつ以上であれば「重要」と見なすべきかについての理論的な閾値がなく、その判断は恣意的になりがちである。そこで、本研究では、ランダムフォレストにおける変数重要度の計算に統計的検定の考え方を組み合わせた、Boruta による特徴表現抽出を提案する。そして、多様な言語項目の頻度を特徴量とする英語学習者のパフォーマンスデータの自動採点への応用事例を示し、その手続きと分析結果を報告する。

■研究発表 1-2（コーパス、ツール、手法などの紹介）

t スコアと相互情報量における頻度効果の代数的考察

宮崎佳典（静岡大学）・田中省作（立命館大学）

t スコアや相互情報量といった共起指標は共起性を測る、コーパス研究における基本的な道具立ての一つである。これらは語間の偶然の共起と実際の頻度を対比し、算出される。そこでは、t スコアは頻出語ではより高く、逆に相互情報量は低頻度をより高く算出する、という単調な頻度効果が言われることがある。しかし、この頻度効果は語やコーパスに課される条件に依存し、条件が変わると各指標の振舞いは異なり、そう単純ではないことがわかる。本発表は、これらの代表的な共起指標をより精確に理解するために、まず典型的な条件を整理する。その上で共起指標を代数的に説明し、それらの振舞いと頻度効果をわかりやすく明らかにする。

■研究発表 2-1（現在進めている研究の進捗報告など）

英文法習得を支える気づきと内発的動機の形成-公立高校における DDL の教育的効果に関する実践的研究

蛸嶋亮介（千葉県立茂原樟陽高等学校）

本研究は公立高校に在籍するリメディアル層の生徒を対象に、データ駆動型学習（DDL）の教育的効果を検証するものである。西垣（2023）により開発され、2024 年にインターフェースが改良されたウェブ型ツール「h-DDL」を授業冒頭の帯活動として継続的に活用し、語順理解と情意面への影響を探っている。特に「構文への気づき」を通じた文法理解の定着と、学習への内発的動機の形成に注目した。現在、ポストテストおよび質問紙の結果から、DDL 群において語句整序能力の有意な向上と、学習における情意要因の改善が確認されつつある。本発表では、その中間報告として、研究の進捗と今後の展望を報告したい。

■研究発表 2-2（現在進めている研究の進捗報告など）

日本における英語科教育法関連書籍の目次分析：BERTopic によるトピック構造の変遷

松岡翼（会社員）

本研究では、1950 年代から 2010 年代までの日本の英語科教育法関連書籍の目次を対象に、BERTopic による埋め込みベースのトピックモデル分析を行った。その結果、年代ごとの明確なトピック変遷が観察され、初期は教授法や文法指導が中心であったが、近年ではコミュニケーション重視や異文化理解へと移行していることが示された。こうした変遷は、言語観や学習観の変化と重なりつつ、教育政策や社会的要請との接点も示唆される。これらを踏まえ、英語教育観の歴史的変容を定量的かつ視覚的に明らかにした。

■研究発表 3-1（新しい研究の報告）

Hardy 小説の伝達節によるジェンダー表象、および語りの文体

曹芳慧（大阪大学大学院生）

本研究では、Thomas Hardy の 14 作品に登場する主たる“characters in love”の描写に用いられる伝達節（reporting clause）の使用傾向を詳細に分析し、動詞、副詞、およびそれらの組み合わせ（verb-adverb combinations）が、登場人物の性格、心理描写、そして物語におけるジェンダーの表象にどのように寄与しているかを考察する。技術的な制約を克服し、長編小説の複雑な会話構造から大量な伝達節を抽出し、TEI（Text Encoding Initiative）タグでそれを発話者である登場人物と対応させ、その機能を分析した。その結果、伝達節からは、男性キャラクターにおける支配・理性・感情抑制、女性キャラクターにおける感情性・脆弱性・物語的露出が見られた。さらに、女性キャラクターの中でも、伝統的女性と“New Woman”との間に差異が確認された。

■研究発表 3-2（現在進めている研究の進捗報告など）

A Stylistic Comparison of Narrative and Dialogic Features in Conan Doyle's Works and Their Pastiche

Li Chenjie (The University of Osaka, postgraduate student)

In recent years, pastiches of Conan Doyle's Sherlock Holmes stories have attracted scholarly attention, particularly in terms of how closely they replicate the stylistic features of the originals. While previous stylistic studies have typically treated texts as undivided wholes, this study explores a more nuanced approach by separating narration and dialogue in both Doyle's works and modern imitations. Building on earlier analyses of lexical frequency, syntactic constructions, and function words, this study aims to investigate whether stylistic similarities or differences become more salient when these two textual components are examined independently. Special attention is given to the modal construction would have + past participle, which appears frequently in Anthony Horowitz's *The House of Silk*. By tracing the distribution and function of this construction across narration and dialogue, the study seeks to uncover how it contributes to authorial voice and whether it reflects a stylistic departure from Doyle's originals.

■研究発表 4-1（現在進めている研究の進捗報告など）

Comparing different transformer approaches for CEFR-level text classification: A work-in-progress report

Chris Cooper (Rikkyo University) & Yukio Tono (Tokyo University of Foreign Studies)

The use of large language models to accurately classify learner writing by proficiency level has been well established in recent years. The overarching goal of the project described in this presentation is to take this one step further by fine-tuning large language models with the whole of the EFCamDat corpus. The goals of the project will be put forward and preliminary results discussed. Both classification and regression models have been fine-tuned using more than 500,000 texts and BERT-based architectures (DistilRoBERTa and Modern BERT). High performance was observed with an F-score of .993 for text classification using both models. For regression, DistilRoBERTa achieved an R^2 of 0.988. For comparison, a classification head was added to Llama 3.1 8B, but due to computational constraints, smaller subsets of EFCamDat were used. When the model was fine-tuned with 10,000 texts, all texts were predicted as B1 level (the middle class); with 50,000 texts, all texts were predicted as A1 level, (the most frequent class). Previous research using BERT to classify texts in EFCamDat (Schmalz & Brutti, 2022) achieved 95.2% accuracy with 10,000 texts and 97.1% accuracy with 50,000 texts. These results suggest that BERT-based models remain more suitable for this task.

Schmalz, V. J., & Brutti, A. (2022). Automatic assessment of English CEFR levels using BERT embeddings. In E. Fersini, M. Passarotti, & V. Patti (Eds.), *Proceedings of the Eighth Italian Conference on Computational Linguistics CliC-it 2021* (pp. 293–299). Accademia University Press. <https://doi.org/10.4000/books.aaccademia.10828>

■研究発表 4-2（現在進めている研究の進捗報告など）

Investigating Semantic Shift and Polysemy in Basic Verbs Across CEFR Levels Using BERT-based Methods

Yukio Tono (Tokyo University of Foreign Studies) & Chris Cooper (Rikkyo University)

This study examines semantic variation in basic English verbs across CEFR levels using two complementary BERT-based approaches: Procrustes alignment and von Mises–Fisher (vMF) concentration scoring. By analyzing learner corpora at different proficiency levels, we identify changes in word usage patterns that reflect both semantic shift (directional change in meaning) and polysemy (contextual dispersion). Procrustes alignment quantifies how the average contextual embeddings of verbs differ across levels, while the vMF κ score captures how focused or diffuse a word's usage is within each level. Results reveal that some verbs exhibit increasing polysemy at higher CEFR levels, suggesting a broadened functional range. Others show stable usage patterns, indicating semantic consolidation. This dual-method approach provides a nuanced view of how verb meanings develop in learner interlanguage, offering implications for vocabulary teaching and adaptive material design.

■研究発表 5-1（新しい研究の報告）

Alfred Tennyson と Charles Tennyson の副詞比較

藤田郁（九州大学）

本発表では、19世紀イギリスの桂冠詩人 Alfred Tennyson とその兄 Charles Tennyson の叙情詩における -ly 副詞と法副詞の特徴や傾向を、定量的手法の一つであるコレスポンデンス分析を用いて明らかにする。また、同分析により抽出された Alfred および Charles に特徴的な副詞やその用法が、二人の著者を識別し得る要素か否かについても考察する。著者識別 (authorship attribution) の研究では、散文作品が対象であることが多く、内容語はジャンルの影響を受けるため、著者識別の主要な手がかりとはなりにくいとされている。本研究では、散文とは性質を異にする韻文の中でも特に叙情詩において、内容語である副詞が著者識別の有効な指標となりうるかどうかについても検討する。

■研究発表 5-2 (現在進めている研究の進捗報告など)

Tracing the Origins of Habitual Do in Irish English (a corpus study of the 1641 Depositions)

Seamus Johnston (Reitaku University/University of Santiago de Compostela)

This presentation outlines the progress of a study using the 1641 Depositions as evidence for the presence of auxiliary do (periphrastic do) in affirmative declarative clauses (do + verb) in Early Modern Irish English. The seventeenth century marked the first major language shift in Ireland from Irish to English, and periphrastic "do" (especially when expressing habitual aspect) is a notable feature of Irish English, not present in standard English. The 1641 Depositions are a large collection of witness statements from victims of the 1641 rebellion in Ireland. From this collection, a corpus was constructed initially reflecting the same counties studied in Filppula's (1999) work on modern Irish English and subsequently expanded to include other counties. The results show several uses of to express habitual aspect, supporting one or both sides of a prominent debate regarding its origin depending on interpretations of the source material: either the construction is borrowed from the Irish language (assuming the depositions are faithful representations of witness accounts), or it was adopted from a now antiquated use from early modern English (assuming the depositions reflect the language of those who recorded them).

Filppula, M. (1999). The grammar of Irish English: Language in Hibernian style. Routledge.

■研究発表 6-1 (現在進めている研究の進捗報告など)

結果状態を表す複合形容詞と結果構文のコロストラクション分析

幸一 尋 (北海道大学大学院生)

本発表は、英語の複合形容詞のうち、第一要素に形容詞、第二要素に動詞の過去分詞形が現れる語 (以下「A-Ven」) に関する研究の一環である。形容詞的受身を分析する Yumoto (1991) は、A-Ven について、第一要素が結果述語であれば生産的としており (a white-painted wall)、A-Ven と結果構文との関連を示唆している。そこで本発表では、両構文の例を BNC (British National Corpus) から収集し、Distinctive Collexeme Analysis (Gries & Stefanowitsch 2004) によって各構文の特徴を明らかにする。

引用文献

Gries, St. Th., & Stefanowitsch, A. (2004). Extending collocation analysis: A corpus-based perspectives on 'alternations'. *International Journal of Corpus Linguistics* 9(1), 97-129.

Yumoto, Y. (1991). The Role of Aspectual Features in Morphology. *English Linguistics* 8: 104-123.

■研究発表 6-2 (新しい研究の報告)

Subjective Bias Detection and Analysis in English Political News

Xiao Yuanyuan (The University of Osaka, postgraduate student)

This study investigates subjective bias in English political news by combining corpus linguistics and critical discourse analysis methodologies. While news reporting is expected to be neutral, journalists' perspectives and word choices often introduce biases, whether intentional or not. Focusing on English political news, this research analyzes how linguistic choices reflect biases and affect readers' perceptions. This study proceeds in three stages: (1) identifying topics using BERTopic to minimize researcher subjectivity; (2) uncovering linguistic patterns and bias markers with a BERT-based bias neutralization model (Pryzant et al., 2020); and (3) applying Fairclough's three-dimensional framework to analyze the sociocultural and ideological forces shaping media discourse. Findings reveal distinct patterns in how different news outlets frame similar topics, with national ideologies and editorial stances influencing linguistic choices and citation strategies. Analysis of news outlets like The Jerusalem Post and Tehran Times highlights significant biases driven by national ideologies, while comparisons between Express and The Guardian reveal different editorial stances. Further analysis of The New York Times and The Washington Post uncovers differences in language and framing despite similar levels of bias. These results demonstrate how news outlets construct narratives aligned with their ideological and institutional contexts, emphasizing the importance of language in shaping public perceptions.

第2日目：9月3日（水）

■研究発表 1-1（コーパス、ツール、手法などの紹介）

The KIT Speaking Test Corpus 専用検索インターフェースの開発

田中悠介（熊本学園大学）・瀬戸口彩花（都城市立明和小学校）・近大志（富山大学）・神澤克徳（京都工芸繊維大学）

本発表では、発表者らが開発した The KIT Speaking Test Corpus (KISTEC) 専用の検索インターフェース (<https://www.kistecsearch.org/>) を紹介する。本インターフェースには、KWIC 検索、コロケーション検索、Wordlist、特徴語抽出、N-gram という 5 つの基本機能がある。また、特徴語抽出以外の機能では、各種スコアやジェンダー、問題によるフィルタリングも可能である。このインターフェースの活用により、データ処理に熟達していない研究者や教育関係者、学習者にも KISTEC のデータを活用してもらえると期待される。

■研究発表 1-2（コーパス、ツール、手法などの紹介）

英語コーパス総合サイト Lingua Corpus Network の公開

投野由紀夫（東京外国語大学）・渡辺亮嗣（エンジニア、元 SCN 技術スタッフ）・星野守（元小学館外国語編集部）

東京外国語大学ワールド・ランゲージ・センター（Lingua）から Lingua Corpus Network (LCN) が公開された。本サイトは小学館コーパスネットワーク（SCN）を改修し、無料で公開したものである。British National Corpus、WordBanks Online、PERC Corpus、CJEC、JEFLC Corpus など特徴的な英語コーパスを日本語による検索システムで無償で利用可能となる。その概要と主な特徴を紹介する。

■研究発表 2-1（新しい研究の報告）

語彙リスト項目提示順序への提言: ChatGPT による学習プロセス観察データから

澤口遼（関西大学大学院生）

本研究は、発表者開発の lexical bundles (e.g., the fact that) リスト Essay Bundles List 活用法を考察した。CEFR で B1 レベルの日本人大学生が習熟度よりレベルの低い(A2)項目と同程度(B1)項目のどちらから学ぶのが効果的か調査し、「習熟度に沿った項目提示」という新たな視点を導入した。学習者との対話が記録可能な ChatGPT により、彼らの語彙学習方略を観察した。その結果、語の中心的意味の理解等、ChatGPT 活用による深い処理を伴う認知・社会方略が学習効果を左右することが示唆された。項目提示順序は、難易度と各学習段階の有効方略を併せて考慮されるべきである。

■研究発表 2-2（新しい研究の報告）

英語リスニングテキストにおける難易度決定要因の分析と自動推定の可能性

川越涼太（九州大学大学院生）

本研究は、英語リスニングテキストにおける難易度決定要因を明らかにし、自動推定の可能性を探ることを目的とする。過去 34 回の英検のリスニングテキストをデータとして使用し、Coh-Metrix 3.0 の指標を基に、ダイアログとモノログに分けて特徴量を抽出した。分析にはランダムフォレストを用い、各特徴量を説明変数、受験級を目的変数として変数重要度を算出した。Gini Importance および SHAP 値による可視化の結果、ダイアログでは 1 文あたりの単語数 (DESSL)、モノログでは語彙の多様性 (VOCD) が特に重要な変数として検出された。この結果は、ダイアログでは長文処理負荷、モノログでは語彙認知負荷が難易度に直結している可能性を示唆している。

■研究発表 3-1（現在進めている研究の進捗報告など）

日本人英語学習者の関係代名詞 which の正用・誤用傾向: ChatGPT と stanza を用いた日英構文分析

田中美優（東京外国語大学大学院生）

本研究は、日本人英語学習者による関係代名詞 which の正用・誤用傾向を母語の影響を踏まえて明らかにすることを目的とする。中高生の自由英作文を集めた JEFLC コーパスを用い、CEFR の B1 レベルの学習者の書いた作文から「名詞+which」を含む文を抽出し、学習者の原文と添削文を比較した。さらに、添削で関係代名詞が保持された文と、他の構文に書き換えられた文に分類し、該当英文を ChatGPT で日本語に逆翻訳した上で、英日ともに stanza で構文解析を行い、母語の影響を構造的に分析した。

分析の結果、日本語翻訳データでは位置格「に」・「で」の使用が目立ち、日本語の格助詞が英語の前置詞習得及び関係詞使用時の脱落エラーに影響している可能性が示唆された。

■研究発表 4-1（コーパス、ツール、手法などの紹介）

中学生向け DDL ツールにおける日本語検索機能の開発と授業実践

柿葉敦子（松戸市立栗ヶ沢中学校 / 東京学芸大学大学院生）・西垣知佳子（千葉大学）・赤瀬川史朗（Lago NLP）

本研究では、中高生向け DDL 学習サイト hDDL(<https://hddl.ddl-study.org/>)に追加された「日本語検索」機能とその実践事例を報告する。同機能は日本語を入力するとそれを含む全英文を hDDL コーパスから抽出して提示する。実践授業は CEFR-A1 レベルの公立中学校 2 年生 3 クラス 82 名を対象として行われた。1 クラス(25 名)では「夏休みの予定」をテーマに作文し、2 クラス (57 名) では自由なテーマで作文し英語表現を検索した。その結果、語順習得に課題を抱える学習者を含む全員が英文構築に成功し、「実際に使える英語がわかった」「安心して文が作れた」等の肯定的評価が得られた。この結果から、「日本語検索」は CEFR-A1 レベルの中学生に利用できる有効な機能であると考えられる。

■研究発表 4-2（新しい研究の報告）

学習者コーパスに基づく英語対話能力の縦断的研究

望月圭子（東京外国語大学名誉教授）

本発表は、2 名の学習者を分析対象に、高校 1 年次から大学 4 年卒業時まで、英語母語話者と、毎月 1 回 30 分から 1 時間の一对一の英語対話を継続した結果、どのように英語対話能力が成長したかを報告する。

結果は、2 名の学習者とも、大学時は Cefr-A2～B2 レベルの語彙使用が増加し、複雑性の成長が観察される一方で、正確性は低下する現象が観察された。その要因として、難易度の高い語彙使用により、正確性が犠牲になった可能性が示唆される。

流暢性は成長が観察されない一方、正確性と複雑性には、負の相関関係が観察され、複雑性の成長にともない、正確性が犠牲になる現象が観察された。

■研究発表 5-1（新しい研究の報告）

Exploring the effectiveness of data-driven learning and its integration with Generative AI

Daisuke Manabe (Kanazawa University, postgraduate student)

Corpora have been utilized in various ways within the field of foreign language education. One prominent example of the use of corpora that has gained increasing attention in foreign language education is data-driven learning (DDL). In recent years, Artificial Intelligence (AI) has also made its way into foreign language education. The current study aims to illustrate the effectiveness of the general DDL approach and the integration of Generative AI into DDL. This study reports the results of an experiment that examined the effectiveness of DDL and AI-integrated DDL, in which learners made use of Generative AI during DDL, for learning an English construction (i.e. the way construction). Furthermore, the results were compared with those obtained from two different teaching methods reported in Manabe (2025) to examine differences in learning outcomes. Learners' attitudes towards DDL were also investigated. The results of pre- and post-tests (sentence production and translation tasks) showed that DDL and AI-integrated DDL were effective. A comparison of the four teaching methods demonstrated that each method produces varying degrees of learning effect. In addition, the post-questionnaire revealed a learner's positive attitude towards DDL and the use of Generative AI during DDL.

■研究発表 5-2（新しい研究の報告）

Is AI Persuasive: A Multi-Dimensional Analysis of AI and Learners on Speaking Tasks

Trevor Sitler (Kansai University, postgraduate student)

This study proposes to describe the differences between Generative AI and learner language in the speaking register by conducting a Multi-Dimensional Analysis (MDA) using a sub-corpus of the ICNALE (International Corpus Network of Asian Learners; Ishikawa, 2023) and a sub-corpus of AI-generated text. With the recent explosion in interest in generative AI, there is growing concern as to how to identify AI language and the extent to which Large Language Models (LLMs) should be incorporated into pedagogy. Previous research has demonstrated that AI is not very cognizant of register, especially regarding speaking tasks (Sardinha, 2024). This limitation is especially problematic given the increasing consideration of using chatbots as conversational partners for EFL students. Previous studies focusing on written learner corpora have been able to identify the linguistic features characteristic of AI that were lacking in the learners (Mizumoto, Yasuda, Tamura, 2024). In this study, the Spoken Dialogue sub-corpora of the ICNALE and a corpus of AI-generated texts were analyzed to identify the linguistic differences among learners, native speakers, and AI on role-playing speaking tasks. The results demonstrated clear linguistic distinctions, indicating the limited reliability of AI as a model for speaking tasks.

■研究発表 6-1（現在進めている研究の進捗報告など）

Grammar Patterns に基づく動詞項構造構文の自動抽出システムの構築

福田航平（東京外国語大学大学院生）

動詞は文の統語構造と意味を決定する中心的な役割を持つため、動詞項構造構文（Verb-argument constructions; VACs）の習得は言語習得において重要である。近年、コーパス言語学由来の Grammar Patterns（Francis et al., 1996）と認知言語学の構文文法を組み合わせる研究が試みられている（Römer, et al., 2015; Hunston, 2019, 2025）が、Grammar Patterns ベースの VACs をテキストから網羅的に自動抽出するツールは未だ不足している。言語教育研究や習得研究に活かすために、教科書分析や学習者コーパス分析に利用可能な VACs 抽出システムの構築が必要である。本発表では、発表者が進めている VACs 自動抽出システムの構築に関して紹介し、使用事例として中高教科書のインプット品質を用法基盤・構文アプローチの観点で分析する。

引用文献

- Francis, G., Hunston, S., & Manning, E. (1996). Collins COBUILD grammar patterns I: Verbs. Harper Collins.
Hunston, S. (2019). Patterns, constructions, and applied linguistics. *International Journal of Corpus Linguistics*, 24(3), 324-353.
Hunston, S. (2025). *Pattern, Construction, System: A Unified Approach to Grammar and Lexis*. Cambridge University Press.
Römer, U., O'Donnell, M. B., & Ellis, N. C. (2015). Using COBUILD grammar patterns for a large-scale analysis of verb-argument constructions: Exploring corpus data and speaker knowledge. In N. Groom, M. Charles, & S. John (Eds.), *Corpora, Grammar and Discourse: In honour of Susan Hunston* (pp. 43-72). John Benjamins.

■研究発表 6-2（現在進めている研究の進捗報告など）

Investigating the “Verb PRON it” Construction in British English:

A Corpus-Based Analysis of Its Characteristics and Occurrence Patterns, Focusing on ‘Give’

Yuta Sato（The University of Osaka, postgraduate student）

This study explores the double object construction taking a personal pronoun (e.g., him) for the indirect object and the pronoun “it” for the direct object (i.e., “Verb PRON it”), with a particular focus on the verb “Give” (cf. Gerwin 2013). Although it is often considered ungrammatical in terms of its information structure, the usage of the construction can be, in fact, observed in British English with a currently increasing usage (cf. Orton et al. 1978, Upton and Widdowson 1996, Gast 2007). Based on observations, the purpose of this study is to reveal the further details of the construction.

Specifically, the study will investigate the characteristics of the construction by using examples extracted from large-scale corpora and analyse the occurrence patterns of the construction. As a result, this analysis shows some important patterns, which are different from the “Verb PRON to PRON” construction.

■研究発表 7-1（現在進めている研究の進捗報告など）

理科との連携における教科等横断的英語教育での古典的文章活用可能性の検討

—CEFR-J Grammar Profile を用いた文法的側面での活用可能性の分析—

八野幸子（帝塚山学院大学）

現行の学習指導要領では、教科等横断的教育が推奨されているが、それにコーパス分析の知見を応用した事例は少ない。本研究では小中高の理科検定済教科書や教科等横断的教育の先行研究で取り上げられる『種の起源』『ファーブル昆虫記』等を中心に、理科に関連する古典的文章を小規模コーパス化し、石井(2016)の CEFR-J Grammar Profile 文法項目頻度分析プログラム(20200220 版)と各種 CEFR-J Grammar Profile 文法項目頻度リストを用いて分析し、学習や教授に必要な文法項目のうちどのような項目が、当該データに出現し、どのような段階の学習者用教材や活動に活用できるかを検討し報告する。

石井康毅(2016)「英文中の文法項目頻度調査のための項目選定と英文からの抽出法—CEFR-J の枠組みでの研究—」

『社会イノベーション研究』, 11(2), 成城大学社会イノベーション学会, 107-121.

■研究発表 7-2（新しい研究の報告）

高校英語教科書に見るテキストタイプの相違

安間一雄（獨協大学）

高校英語教科書 10 冊（2015 年版，3 年生用）を対象として，収録されている本文テキストの各文を Bain (1890) による古典的分類に則り 4 種類 (expository, descriptive, persuasive, narrative) に分類し，さらに課内での位置づけも考慮した．その結果，教科書によりテキストタイプの内訳は大きく異なることが判明した．例えば教科書 C では expository が 13%，narrative が 68%であったのに対し，教科書 M ではそれぞれ 58%と 22%を占めていた．その上で，どの教科書がどのタイプを典型的に反映しているかを対応分析により明らかにした．本研究は高校での教科書の選定がその後の英語学習へのレディネス形成に大きな要因を占めている可能性を示唆している．

■研究発表 8-1（新しい研究の報告）

単純形副詞のタイプと容認性について

田畑圭介（新潟県立大学）・山縣節子（京都外国語大学）

単純形副詞 *deep* と副詞 *deeply* は、*He dug the hole deep/*deeply. The ground was deeply covered with snow.* のようにその容認性に揺れが観察される。本発表では、Nevalainen(1997)が示した単純形副詞の4分類を基本に、対応する-ly副詞との意味に関する重なり指標<+overlap in meaning>を付加することで、そうした容認性の揺れが説明できることを The Movie Corpus(2000年以降の作品)のデータに基づき例証する。また命令形のように物理的距離が明確に含意される場合では *deep* が自然となる点についても合わせて論じる。

引用文献

Davies, M. (2019) The Movie Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/movies/>.

Nevalainen, T. (1997). The processes of adverb derivation in Late Middle and Early Modern English. In M. Rissanen, M. Kytö, & K. Heikkonen (Eds.), *Grammaticalization at Work: Studies of long-term developments in English* (pp. 145–189). Mouton de Gruyter.

■研究発表 8-2（現在進めている研究の進捗報告など）

No point/sense/use の補文における形式的変異について

南佑亮（神戸大学）

名詞句 “no point/sense/use” に動名詞補文が伴う構文パターンには、*in* が伴う場合(*in V-ing*)と伴わない場合(*V-ing*)という2つの変異形が存在するが、The Corpus of Contemporary American English (COCA)を用いて当該事例の変異形を網羅的に精査すると、3つの名詞の場合に共通して以下の事実が判明する。(i) *in V-ing* 補文の分布が“there + be 動詞”の先行する構文形式に偏っている。(ii) (*in*)*V-ing* の代わりに *to* 不定詞補文が用いられることが稀にある。(iii) 補文に主語が表現される時は、*to* 不定詞補文の事例の相対頻度が大幅に増加し、動名詞補文の中では *in V-ing* の方が好まれる。本発表では、以上の特徴が構文文法における構文スキーマの概念、および複雑性の原理(Rohdenburg 1996, 2006)の観点から分析できることを論じる。

引用文献

Rohdenburg, Günter (1996) ‘Cognitive complexity and increased grammatical explicitness in English’, *Cognitive Linguistics* 7, 149–82.

Rohdenburg, Günter (2006) ‘The role of functional constraints in the evolution of the English complementation system.’ In Dalton-Puffer, Christiane, Kastovsky, Dieter, Ritt, Nikolaus and Schendl, Herbert (eds.), *Syntax, Style and Grammatical Norms: English from 1500–2000*, 143–66, Bern: Peter Lang.

■研究発表 9-1（現在進めている研究の進捗報告など）

Bro Constructions Across America: A Twitter Corpus-Based Study

Yoshikata Shibuya (Kanazawa University) & Kim Ebensgaard Jensen (University of Copenhagen)

This study investigates how casual address terms—specifically *bro*—are used in American digital discourse. Drawing on a geolocated Twitter corpus and framed within a usage-based, cognitive sociolinguistic perspective, the analysis focuses on five high-frequency multi-word *bro* expressions: *my bro*, *thanks bro*, *my lil bro*, *my big bro*, and *what’s good bro*. Using correspondence analysis and spatial heatmaps, the study shows that these expressions exhibit systematic regional variation across the United States. While some (e.g., *thanks bro*) are widely dispersed, others (e.g., *what’s good bro*, *my lil bro*) are concentrated in specific regions like the Northeast or South. The findings demonstrate that even highly informal, internet-mediated expressions can be entrenched and socially meaningful, functioning as fully-fledged constructions (in the sense of Construction Grammar; cf. Hilpert 2019: 2). They also suggest that such phrases index regionally grounded styles and stances, reflecting local norms of solidarity, affect, and identity. Methodologically, the study illustrates the value of combining multivariate statistics with spatial visualization to uncover complex links between form, function, and geography. Overall, *bro* constructions shed light on how linguistic knowledge emerges from use, and how grammar, identity, and place interact dynamically in digital communication.

■研究発表 9-2（コーパス、ツール、手法などの紹介）

On building a speech corpus with word-level annotation using Internet Archive Radio Collection

Takuma Natsume (The University of Osaka, postgraduate student)

While corpus-based studies of language change are well established using text corpora, such research remains relatively underdeveloped with spoken corpora. Text-based corpora are often publicly available and widely accessible, whereas spoken corpora are not, with many studies relying on audio materials from recordings collected or recorded by researchers themselves, which are rarely shared publicly. Furthermore, the few spoken corpora that are publicly available tend to be small in scale and limited in temporal coverage, making them unsuitable for observing long-term language change. This study proposes a method for constructing a diachronic spoken corpus using the Radio Collection from the Internet Archive. We apply multiple tools, including Whisper and the Montreal Forced Aligner, to generate both word-level and phoneme-level annotations, and compare their performance. By documenting and evaluating these procedures, we aim to provide a replicable framework that allows other researchers to utilize the Radio Collection as a resource for studying language change. This approach addresses both the scarcity and accessibility issues of spoken corpora, and demonstrates the potential of large-scale archival audio as a basis for corpus-based phonological and sociolinguistic research.

《会場アクセス》

公共の交通機関をご利用ください。

●北大阪急行線 箕面船場阪大前駅下車 徒歩 約 3 分

●阪急バス

・小野原東発「呉羽の里行」、「千里中央行」 船場団地下車 徒歩約 1 分

・阪急石橋北口発「箕面船場阪大前駅行」、「千里中央行」 箕面船場阪大前駅下車 徒歩約 3 分

・阪急豊中駅発「千里中央行」 新船場南橋下車 徒歩約 7 分



キャンパス内案内図



外国学研究講義棟 5 階案内図

507 講義室	508 講義室	509 講義室	510 講義室	511 講義室	512 講義室	513 講義室	514 講義室	515 講義室	516 講義室
506 講義室	530 同時通訳実習室 CALL教室 学生交流スペース 上部 お手洗い エレベーター								517 講義室
505 講義室									518 講義室
504 講義室									519 講義室
503 講義室	階段 529 国際教育交流センター 箕面分室 テラス 527 光と平和の広場 テラス 525 非常勤講師控室 階段								520 講義室
502 講義室									521 講義室
501 講義室 ワークショップ 研究発表	528 学生交流スペース 会員休憩室 賛助会員展示								522 講義室 (HALC)
								523+524 講義室 研究発表	

※記念ホールは同棟 1 階、懇親会会場は 3 階となります。

※628-629 講義室は、523-524 講義室の真上となります。

《大会参加者へのご案内》

【大会参加費等】

- ・ 英語コーパス学会会員：無料
- ・ 非会員：当日会員参加費 2,000 円（2 日間の大会全プログラムに参加可能）
- ・ 大会（ワークショップを含む）への事前参加予約は不要です。ただし、懇親会（下記）への参加には予約が必要です。非会員の皆様も、懇親会にご参加いただけます。

【大会受付】

- ・ 大会受付は、第 1 日（9 月 2 日）は 9:30 から行います。第 2 日（9 月 3 日）は 9:15 から行います。受付場所はいずれも 5 2 1 講義室前です。

【展示・休憩】

- ・ 5 階（528）の学生交流スペースは休憩室としてご利用ください。茶菓のご用意がある他、賛助会員等による書籍等の展示・販売も行いますので、是非お立ち寄りください。

【無線 LAN 接続サービス】

- ・ 会場では、eduroam による無線 LAN 接続サービスが提供されています。（利用可能なのは、eduroam アカウントをお持ちの方に限ります。）その他の WiFi サービスの提供はございません。

【昼食】

- ・ 第 1 日と第 2 日の両日ともに 3 階の食堂「レインボー」（11:30～13:30）が利用できます。あるいは大学周辺にもコンビニやスーパー、飲食店がありますのでどうぞご利用ください。

【入会案内】

- ・ 大会当日に入会受付をしております（年会費：一般 5,000 円、学生 2,000 円）。入会されますと、当日会員参加費は不要になります。

【懇親会】

- ・ 9 月 2 日（火）のプログラム終了後、情報交換会（懇親会）を行います。なお、会場準備の都合上、懇親会は事前予約制となっております。参加ご希望の方は必ず事前予約をお願いします。

英語コーパス学会第 51 回大会情報交換会（懇親会）

日時：2025 年 9 月 2 日（火）18:15-20:15

場所：大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟 3 階 食堂「レインボー」

会費：一般 6,000 円、学生 4,000 円

※ 懇親会参加ご希望の方は、参加申込 Web フォーム（<https://forms.gle/KV76c5RMqJohjMJd9>）から 8 月 23 日（土） までにお申し込み下さい。

※ キャンセルポリシー：

8 月 24 日まで無料、8 月 25 日～8 月 28 日は会費の 50%、8 月 29 日以降のキャンセルは会費の 100% のキャンセル料をいただきます。キャンセルのご連絡は、事務局（jaecs.hq@gmail.com）までお願いいたします。

英語コーパス学会（Japan Association for English Corpus Studies）

会長 田畑智司

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学言語教育センター 小島ますみ研究室

e-mail: jaecs.hq@gmail.com 郵便振替口座:00930-3-195373

URL: <http://jaecs.com/>
